KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

ヌ5
4862
3

特
ヌ5
4862
3

本朝諸士百家記目録

卷之三

奥州若狭之事
大津中ゝ町裏店浪人ゝゝの事
下人茅屋住の事
但馬国常楽門左馬狐より魂とうぞく事
ゝゝ後人左馬狐の茅屋完左馬林系左左馬
出石の社司より郡代に成る事
山城国愛宕郡左馬狐をだく左事
仁条治左ゞ狐狐の事

前集

伊地知文庫

源人醫玄恩法師の事

本朝諸士百家記巻之三　前集

玄像三尊九湾願白之事

大津八丁い郡小近くなる海乃大十三次の名所に布明寺を
なる人なる社若和田流義家を九郎義昌九地に所よ玄像三
尊九湾と云聖人西に中は奥孫表長の n 城主より入百石と知行
し足軽百人弟り馬廻り侍らしら弟傍輩とは清水の
西に八ケ年ゆかる羽前大浦人の弟之下郡り来て玄恩
庵をこのもとに大津中の所とおよ終める裏右かりて暫新代
くし恩代に和續の新行かくるる社の不審に思ひ
為海西九為検雅若深九世尊も分ならも玄恩なる姫一人
と海村つくとりと乗りと乗り幸住と送りね成人と海ム
ちくひ母の楽よりさうり代為さ九まち草家の家

とたちかまてかの母と付ひ[illegible]海さなるのしてはれ付
ろ物よりまれまてくてをたたんたそうをとるをは家流よりて
て親のをさを都より友縁と寝光滅しきれ〳〵無とをてし
てあつしむ消れろく悔もなか　ものとけ紙事とうれてくうあ
ひさ糸ハ色らうさ更物をわ代世ぶ代りてかんわハのをを無下
ていてきをて流物なくぶ行ハ物ハつけ〳〵ふくを後さまうり
ろう。こて九後つ情宅のむ〳〵ひよ米屋物利物とて為徳の老ふ
物し米を貴迎て日流藤流を赤大貴を儀紛夫
せり。夜ようろ三義活ををる事なをハ家門かりかをと中
京ごり下門ようを吟係仕つをを代を儀の物ろ通寺所中
の着九茶の蓄仕ふ屋男ハ代ハの事流ようを町年寄の事
物をを報をあるを逆ろ。裏屋小流の店かりを渡火ふ流ろ

人ちんあつをを春く婚くふ男ごをを仕家云金子中の男雖ハて
ををんよりを逆西着九ハ報るハケ欲ようを門うくをを上報をうけ
吟味よわををも知ををるをを不を業物逆地ろ事ハて逆物ふき
物ろうをを気なりけくく業をめくをしんる汎向裏ようを春清人
こを春ろをを報春の家逆物のをを業をめくをしを逆業の仕欲
ろこをるををと子門ようを云汎ハ家合を付ての洋宝侍物者のハ
けるハむこを春ろ男物まくをしを朝久を烟ごを云ごを九程の
者なを代物と郎ようんを春ろを家家人者の事ハ逆ハて卒ふろ
ひ分をを必雖ハと九ハ逆業を止ろ。ようを人ふををるをろて代
ろをを一の事ををわ逆こを九後つ焼南年六を業物ふを必
逆をを物のをををハつろよ菓ハをををを逆をををを逆ハをを人を
ぐ要細よ物よハ知ろををりのををハひをを物を春逆物を物ハ同ど

評定一むきに極りぬ。さてつきて兵八は程びたる子共を何とかくしてこの
ひめ役にて某姫を女として世人飛鳥なるに、なげかしとせ
んことを思ひて、飲食の事のみをあなどれど彼姫何となく結ば
ぬの顔をしてゐることもあれども、机に凝らしていまだ定まらで、おそ
極りけれ。扨通用利害方へ言つけり。これに依て定むべし。内々合点
して給ふに付、一條は、此度の事をもわけて終には我家の為
町内にて、此度の騒動もしれなり。是にて家を継ぎ立たせて
別家主方がかり、後家のなきをもなほ又、今日中に此度家の為
らるべしとの役にて、参りたけれど、只今まで寝代にて渡へむ。此旨
は家中の者どもに、殊の外、某かせし外、此役は下されたき事なれば
子細を申し届けたり。内は利不尽にて家の為めにとの段の家主
下らぬ様に入の分、立派にて家は外の宿代は先づ皆立ち　廿日

切の備まれば、家に関して代々かく明しを尽くしての奥様なれ
子細も是なき事、急ぎ家を出されるべし。然れば尤もなることにて、極りき
としてわりなく数積り入れての役にて、差図して合点を頼む
子細を申し立つ内家の為め事なれども、此方にも法に存じてけり
さるを誰にても分け置きて、骨を折る人にと申しければ、是を気兵
衛は町中へ寄合を附て、去る処へ人にさしてとかく其入用数代、
差角これの座にて着下させて、勢程より是れ勝の内を是の喉に立ちぬ
まじ。上へ訴へて家を出させ、大津中をかけ付掛けまいりて
申入れたる年寄理を述べ、訴状を認めて広間へ出でて、衛門に
尾張口上書を作て申上る
右の処にて先刻津中町年寄の理をもうし上げ
右のとほり

一
私領米商売仕候ニ付、当月九日より米を買込蔵納
を仕候處、大分之儀ニ付、在々百姓共ゟ入候ニ付延引致候
裁許米を以金高ニ付、直段下ケ私宅ニて相対
致し、相頼申候處、私宅ニて相対ニ致し度存候、家主人
赤大豆一俵宛ニ付、御役之者村役并ニ組合町中も立
会上之儀を相頼、下ケ遣候様仕度事、右之者町内之者
ニ而、御重て出候様ニ御米一石ゟ一石五斗宛売払申候間、
得共一分五厘宛ニ三斗宛方へ中売込、家之者共三ヶ年
家主村役并ニ請合、是迄之通、御領分之内何れ之町中
家主并組合ニ而相対致し、御尋ニ付申上候、家主人
三ヶ所之家を以差出申候、御付被遣下候様奉願候
難有可奉存候　以上　年号月日

右之通ニ付、我等ゟ申候ニ付、家主村役ニ付、三宅家主人
三ヶ年之間是迄之通ニ致し、其上ニ而申付候ニ付、右、方ニ付候ニ付、
今般御上ゟ年貢米并ニ利分之大豆米も俵数之儀町役者
太夫重ネ候ニ付事ニ付、町内之者ニ年も当年ゟ之
ニ而致て家を請候様、三ヶ年之内御請ニ可致候、三宅
方ゟ家を請け、延引ニ付其役并ニ三ヶ年之請之家ニ付
只今迄之通三宅之通、御用之様ニ付、着座之事ニ付候様
ニ致し候て、右申付候ハヽ、右之段可申上候得共、御尋之通
三ヶ年之内ニ而作り候之儀、是迄之通ニ付、私并ニ家主
ニ致し、御座候ニ付、出入之儀を仕置候、右之通ニ付
世話人共、右之段是迄之通、出入之儀之者ニ付、其役
所へ出候ニ付、罷出候口上并ニ御村役共ニ町内之者共ニ

娘とわざもしたて申しける赤飯の事と流布せり申。流布略
たるとも上代の事なれば流布ばかりにてもなく
せまほしくよのもの所にて茶湯の時ばかりにて
ト侯と流布なれ。茶人へ入るなれば
初れお侯（茶）なるべし。言上ひ出日ごろ私ごの者れ方に
ゆれ方こひろめ赤飯大分に作り出。私ばかりこと無なる旨
通ふ糧の侯ものいつしれよと大分ものこと出ひ五七日ひし
おそ新こと糧ものて公今朝もこと赤飯をこと出ひ初出先
ケ侯ものと計ものか上云事。流布ものの侯ものもの赤飯を
ひ着石出こと出れ為下こと。侍之富ものこと赤飯の作ものもの
為。こともれ為これ為これ為侯ものこと出下こと。侍こと出ものこと
流布こと出ものこと出ものこと出ものこと出ものこと

中屋くいたりて私達人おわかりの通り、長崎開港に付き
ほべしとゆうて、あり合せの物、仕舞ひ、商売に仕付き
やっと言上して、私共は、新町の中屋、方達人の娘と、
上へ、あがらせたらよかりけりと、
娘とそだて、こ、ま、孫娘の、
て、娘は、私共、と、楽ようして、月日を送りて、
とかんて、御ご、代、
親のなくなりて、
の、対、
なって、縁、
し、
くとゆうさるる、方、

又、洞とゆう、
そ、れの、
又、
ます、
なと、
縁、
嫁、
ね、
ざ、
し、
ど、
七、

惟武士たるものゝ如くきはめとも金銀討返し家風の宝珠
粉しき修行をたて誰とあげて縁に忍子は二言なし町中おゐて
鉄炮は作付るほ事拵に年寄理の家主組中々にに宝
を取立もらひてきまく進獄門の木にさらされける此二家の浪人
國白此事世上すなはちかくれなく上も重ねて武勇の誉
此まゝ天下の諸市に於ひ二度目主に立帰り猛に勤し
可有とて預りも称義は万事万物にかゝり親族しかりに
あるとは秋に属し金に属すと秋は草木実り鳥獣は毛を
ひそめの備る人を収斂して利を守る事を利の理わかる者
人にある元気義なり

常盤門太夫狐に魂ぬかれて迷ひし事

昔紀の国城の城主常盤門太夫と云武士書院にて

若き時よりひくわんとうく事好けり若年より一家のせ人金銀
わけ見物ゆき見物し上事をなさずして人のそしりをうけず
わかまゝにひまをかけ長日非番の折には包丁のわざ
に美食を好し又禅とはすこしも好くの胴炙し寝覚を楽しむ
好し明衣菅原宮九衛門方にて一通さしまゐらせ候事
酒らんとひらかれらみなる後又衛門方の神楽坂大蔵は出縁
に蕎麦切中付は家にして只今出布に候
おかしと非番の浅茂をしあし

至るまでも道場主ハいつもかくのごとし。私心なく有道の人ハ親類縁者にもまじへず
病気と偽りて髪を延すもあれども是ハ道をたつる事なり。名人名家も
いづれ皆家業を立るといふハ主家の恩を謝する心を以て其場にいたれ
帝の法義を大切に守り拙者方へ頼む事ハ善悪を以て忠臣たる心
よき弟子ハ稀なり。其わけハ師匠たる人の心を以て一門の繁栄を望むゆへ道場主ハ
いずれも道場を守らんと思ふ心あるべし。其わけを尋ぬるにうへに其方こそ
仏法の道を祈る者是より此事を語るのみ。夫故に三人ハ後日を勤ての心得なし。
彼所に至る者ハ少しも合点のいかぬ類なれど是を悟り誰人ハ
必ずその武士たる者が天狗の座敷とおもひて事をなすといふて
人ハ流儀を立てたる上に学び得るとも事をならずして流儀人と立る
事を成るべき人ハ此事をなして畜生ともいふべき道の事あらば
とぞ思ひ知らすべし。ぞやと武士が往来して言ふハいつの世にても座敷無地しに流

重荷の弓傳来ハ流儀を立る事。三人の細工を以て無益を
捧ぐるなんど兵法者ハ秘密の名方いつも拙者な
ど數百年を立つて是より心術をさぐ
稲荷の表を越る古流を悟して近年
古も思ひ居りて武士の流儀に心気
うてまし。定て師匠も心得ず人
なし。其一言もって一座の流儀を立
自然の道武士の法を天狗も見ぬ者
都の氣を以て吾等の一流を立
世の人を心得ぬもの也。
はせまるもかしく流して人の因果を云

の様な所へ見物者が。発句は知らぬ者とて。座興の事にせし所
是は残る二人も口々に無念の事無念さに女中まじりて座へも
見る人の眼にあひても迷ひあるし。兼て聞及びしそだてと興に
もてなし。いさむ主の物好きの数寄者とて。かいそくな事に
わるく鶴亀の縁は。むかしの家具出石の社の事をつくして今宵人
さく見えよ今様消でものゝ世に任せて古風の流れを三味線にて
如何なる事てはとりへさ三二三度は酒くみ流しみな遊び
刀を提げて座敷を立出で出石の社へ向ふ頼み二人打寄り枕す
うしろ所へ見えた著がこれさん是こそとこそ。神も見ゆる
と来きとさんと囲碁に様々はや座頭もとを出すまゝね
門番の是は一人出石の社へ詣で続て縁を添へつ科に枝に時を移し
それからは年月に知らぬ行の古流三代前後よりつゞきし

登盤がおもしろくなり皆ふ行き来し見物者折ふしこゝかしこれ様子を
知らぬ者ごさんなる室で出がるはんひつくらなかりしが見ゆる有様にて
とかく下諸でゆるされけうつるたどのんで語らへ申す様々して帰る
六十余りの若衆と見えて。右れおうに暖めしんかのよく也。御所様に年
又を住居は野干と山法は打絶へ。寄合師の事れんと見る申す
殿様の御意悲を下され下されて事なく料理とて事済みき
礼様に御しかり御待もてなしよきに是へ入る事を引くる
いのとそれ近寄せてくらふ抱きて打つゝさ事悲しき
さ行の事もれからそよ数ある子細とりきし近寄りて至て
大さ次けれなまれもぬ々とゝ遊の御前の様なる
郡代より頼を女房御ら。今日宮上吉日にて御前に
御の郡代へ舞へとはる。今晩常よりなでとたがの縁来て見る。

遊河にかくれなし・我もさる初午の日学文所の二階座敷に立寄
つて今晩の約束を恋路の身に延紙を我もたのむ智を今に代て一筆のりた
東手の合せたまはるゆへ此方にも神さうか力に叶ぬ事なれば
貴方の今宵の孔雀など菊道の風呂を立てかへり候さはくいさ
風呂へ入る事は名聞を叶はさぬに慈悲と申はさ様の御殿の事
わかきむ風呂をすまはのまゝ連でかれぬ様に見えてかれ
先それ風呂といふはさまり有る類海女御はず叶ふかれたとは
首つりとかいふくいは猿方を相伝はられしよし今宵の事に
また此方に下る若作の八勝の様を見せんとて誠にくむくさ
女房も蓑の法の座をさせし是にてそれがよい小指一つを切のれ
素物をれめよつく爲もと何か知らぬ方の前葉とて其ほど苦労
まれ出で白紙に包てもつて出る心の指切事いざ見せ事にこそ

に畜生なぜうたやつがかくびやうぶんとよびたつてしま
うしなわさくたれ小指を打ち切つもち切そうしるる小指をな
かれあとに合せて紙薬をそわし渡くさればとうて焼
せとりくちのびしてめんで後まに其座に血止痛まかくなれど
とくに此なるが手に一盤は薬の如をとんでいて若俗の力にあさ
えんといふ事になりつんで色欲の胸にわかる迄にすこし野干のやう
りしてつかふもれ物までがちまに悔さん縁に衆不断に見えて来
猶も迄けぬ迄見るにと着て小袖をりてとは宿へ帰てま屏をさやと
さていふて仲ん間の迄座敷まれるをとしあか座ゆりのをしと事にしく吹
其中にも中にあ上にはこうしとられの名くらかれはる指先へ
この上下の物寿座足袋を上る様な月代を指節かをまりて
ワりやうなる男ちは端ん不染見分の郭までもれ何でれ行くれひて

宮つりハ義をしらねバ饗迎りの持なしやうこれとおもうしけるが
のかれぬ人こゝでも専ら種と成る凡全草の部ノ千計しとて鳥らく
つゐつきに清げなる道の挟の膊も赤くして行雛ハそ
ら見苦しき草履見と言ふ凡の義を是とのせ凡しめ
しれ言るハいつきくらしめるくらつれげなれバつまんかし
あれ程猶ゆうけきとくとかの猶を見出おそしと松のえゐず
つまひ見るいかれと世する天晴の若見てそく一様の思ひ衣ま
淡黄緑の立をとつさるもとず八人のがせゆき立べしぬ
おさ人の家と白壁見にる長柱二合縁ぞたる中間丈たるかでつて
すれバ見れおやがせり婦ハ中計先立出せしつんとの編衣流
神おもを立てゞ一重計りに同じ家ら高枕なる松明の総成なく
灯挑をつせすれ人を立てかれ程をそかべれ出ると

旅事支見入ちと冗にもとき世家居ちも丁計塚のそひをも
らる人様を日おもそ出迎は鞍もりところにてかまへる家
途中おて見かへ門前おもそ入ぬ門前にまへとあをる灯挑
をともしかさ中かろの用意したる中間丈九尺あまりに並
居る玄関には見性丈夫毎ん揚子差をゆる手燭をもて
炉緑入の書院と入りまへる障子を入りてそれの方に鍵笹
風爐細工なる通路を付て風呂屋揚場と立つゞけ廊下
たくゆさけくけを重て又さたる一村松の木深き茂みが
下に数寄屋を建たる畠を前にて給食をせり御殿
の松とそれにかけ石これを造ぬる植込なる松茸の
岩ねらそろしきつとせいくさい水辺にせられし連山
泉のふち盤石間山の中葉そろひとあけてある所ける

うさぎてもどろなるわやもたうしんいさ碎て海へ流れくさん海へ
やとうをばれわひこんとうれ社へ七まぬ道ちうう
しとあるひとうれ方なしいふ不思議なるとも神殿へ
よりてくくこれ常盤ぐうんざれ大ものこふ変れりわ
たれ抓ら梅毛孤を化こ玉ありとうれ孤ども化こ玉
小夫れ問ら唯独ち稲よりめうて龍ともれ風呂ちくまひて
て居らしとぶくふもうし出りて化まるわ

岩崎宮左衛門狐をたらこと事

儀助ら着れ云けるハ去行ら面白孤ハ狐の化れと者
とハ事稽り氣のうるるる者別色なん直化とうてそれわう
あそ弥のれ此ハ狐れ人と化したるの天下安うまるしハ人ら狐
と化したる哉未ま孤渡頃の侍ら最後ら岩崎ととるまち

生ま玉孤ま号ら着つて郷ら風流の富士武蔵ハ白梅文ちて
年し和あの蔦長れ門業文の長流ていなぐ孤
ま見れたるる通洲ふ長し頃ぬく彰上ま一家中の岩崎宮
初下ふ師とうつる世界ま孤ま孤ま孤ま酒わ長
石出ま玉ま所様踊ら彰ら出以外孤奥勝古今たし男ま
やまの岩崎生ま玉うの所利後着ま海ら孤ま
巻ハ沙うと孤のうるあま孤ま不風ふ神ま玉前稲荷ま玉朋
ま人のうるこうるあうくハ分ら人ら金ら人事と西十月岩崎
どうまれ孤ら着山ふ社見ら孤ま玉の事とハ海くあれ中
ま玉ハと立て岩崎京勝ら情ら左蒲とハて農生ま方術伯夢
乗ら海ら下ま玉ハ孤ま玉ふ様養殺ま玉ま玉のれ孤ら孤ら
ふ孤ま玉ハ分ハ情ら孤ら用ま玉れ孤ま玉ま玉ハて孤ら海ハ孤ら

こゝに一人編笠深くかたぶけ出立ちの様子
なとあやしき数とはしなくれたるもわくなる暇あるまつ
道程遠の草乃風来を乗りつゝ
なと家賀くゝ流の美やんとうつ漏くうて駄くまち旅宿を来た
るて大鼠もたゞけ着いぶくとうもつまでゆるりそひきて
ゆくゝ流どとうてわそぶんと壁子の拠をそろうと立ぶいろ
変な男をと投うて子どもの流れ程一ハ美とけうあ一流くて思
ひるハ紙ハ紙をとうつどもの男めうぶいうあ男と年ハ
拠ハ人うとうあうあ出くゝ流しそやべさと鼠寝とうけうつ汗
しておわくびつめとうて紙の流間でうとるびわて美ハ
年うの流ハ近対でもの流ハ
わをとうて作部ハるもわくくてのわりくくゝ流寝ハ気打ハ

ハるハ流くゝ流をとうくゝ流ハ流ハ
とうとも流くくうあうあ流ハ
美くうのくくハ流ハ月くくも美ハ道
ひ紙間ハ坂の道ハ実流くくうあうあ流ハ
ハうあうびうとのハ云ハうび流くくうあ美州でも仕合
ハくくくびハ対縫ハ去顔びくくハ擢ハうびくくハのハ人ハ
ハのたくうハうハ美食ハ流ハうハうけ着ハ
くくくくハ流ハ流ハ流ハ流ハ流ハ流ハ
ハうくくくくハ流ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ
ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ
ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ
ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ

路銀のいまさ代ねよ人の方とかんかるいつおいぶりし旅はおもわけ嘆
ハ海さりし人と東の方や根ハ男丸うかわれりしとりいつかあわれん
とんやかりまへの元気さ悔のうちもろておりうかがれどもて
円年の内に三十年は男となり旅路をそれとよ喜り梅ひなのさ
し些也そ気もさうやうかあつさらとんと流れたどくいて行く
道も面白うしたんいぶかせ走る丸くらう旅修行とさる流れの今良
丸山の酒屋上の道へいまだ行く料理を付けの事に何やかれ
何ねかれとよ春道へいの経もか身へしとうへてくかつ流料の
とにハ前の当しおあそも絡かん今年とけて油やさうひよかれ
会釈がよかりもなくいぶつかなぎ付かうしくと来るが捧の
とたいぢのとかずさだれ大せれ下さるへしと志てくと取りよ
旅修にてよく築くして何を梅しくかんかるて膝かもこし

きのうまさハおの大宅や十足ハ継によおそそだふれらしが心気つかひ
かさりしな根に料理ハ油揚鯛とてんぷら鴨といつ方も更えれ
わけそうう浮うまるかと飛のでくくよあわせんと打わゆうて人もゆく
祇園より祇園の社に詣てうなずつせともう八坂をさして清水まで
雲山園山南禅寺記堂若王寺吉田の黒谷東が谷ざん
くし百万遍なまる上寺にもしうや我の心は流れとすさい
石をはりよ点じと飛鳥井の宗十暇よ出然今朝の事
ま滝を出くく京中の名所旧跡堂社仏閣頼りかく拝そ
くまとだ何もやうう酒飯僧の事もなく七つ過よとつまおりし
さうもの抓も気つかまでてんとた元すよぬけうら御しくそそれぞそ
けふわつてても此侍何丸合点のゆかねわ若化さまでておかし
さりけんとて旅修がさんまる日とを出でいひくこわまつけどもねふさせられ

いつ頃なる事なるかと人々問ねあつまり酒肴を設け
酒宴こゝろ思ひ思ひのこゝろ思ひ思ひの料理をわつ
たつるなんく酒飯過ぎて相撲場に立至まぬ
永の時間なれば建一位なるまゝ海ゝ
兵衛殿なる物のそも酒の相手なるべんつるあ
ゆるべし方一先横落入て遠寄の度ゆる
用れ精寄と交れ手ぐ兵衛ゝ道
手ゝ物わの者ゝ人もなのあ
己が藩家へ出げる祝いて
欠居りしが重藩の上酒
面きんわもどいやく
紙行かりて兵衛ゝ

とまりさだめて秋とふべきせんかたなかりきとも浮びのあそびの
さらべし追付かへりまいらせ候なれども済の様なれんとよれ酒の肴をも
ゆるとかんたさせのみならず非常とさびしき事いかゞ宿かりの
事侍る今宵は仮寝の枕あてもの由にまかりたいといふ宿のあるじも
料理は其までよりさんの事も御まへにて今日の料理代追付候と
へ申出されし白人の其代九合六十五文とて拂ひ置て此酒の肴を
とり出だしてさらにいふやうなる物語に宿の通でさあらばけふの夜はならずと
やがてのちに旅人は更け渡りてかへりて今宵のまよひ
それ新村の寿屋へ参りて息女若狭かたちとゝのへてそのまゝ
かねてつらぬかんと中せしが往還とし文をおくりしより
そののちなかにもゐたまへど此まゝ助けてうきさまやみにても
さらに出来ひでも悲しくさてそのまゝにとれて居打また

し侍へ年の暮より一筋一とせの掛乞の算用
一枚あらそひて梅の花つぼみ侍るも目出度おぼえまゐらせ候は
いかにも若き物ぞまちかねてまいるべしと居候も居にて候
おもひは侍の若き衆の心ばへのこりをひとつにもとめ
くせ者にて宿をたのみぬれどもかけまいらすと有ければ直に
さへ移りもかの事なりける若さしさく文箱にもおいて下さりたく
角に打ちわせたる羽織をいかにわきまへたる者の若き出あいの
出入に申せと責めさいなむ事も是なれど此まゝ宿の者にて
の事もかし物語に染めてかの染の箱あけて此事どもまいらせ
聞くに染の染をわが物にてあるべき者を呼びて
遣さる間に辛抱を聞きて涙の暮を見る者と喜び
此の日頃の思ひまさに送りて今宵も空しく若衆の気をもよほし候

主将言とハ云がたしかたらしむべき是ハ信ずる言合迄とやらん盗賊の類ハ恥べし此流れをすて主あるものハ武士に似合ざる所なりしかれく猶子を持来たるまで流漸しかるべしとせいしけれバ星右衛門我猶子をつかハさんとて心得ず世の流れをおもむきて其ひとつに様をみけるに御主ハ此流の浮世にてかの五郎右衛門も十日もさん止めずして御手代人のかゝ猶子を持来って宗七に子細をいひけるに左右なく此の人止ねがハのごとく眼よりこぼれ何ぞいひさらん実の人命とハかゝるもの御手の所ハつとめ出来とかく人間の首尾によりて不覚に武士たるもの是のちも去世ハ只八路縁ゆゑ是をもそんかれこいひ居ば猶陰陽師律儀の油をかけ止事とかくひとを弟子事わやくしたのんは家来にきこしもとして漸しそこくいはれバ前後うもう

たとへいかにもなれやうし家来共をつかふにも行の流と心得べく是非に其身をやしなふ事ならぬ下々家来をもやしなふべきてハつよく堪忍せずんバならず然れども無事に行ぬ事もあれバ其後我と武右衛門将監しその為に彼料理人を出しけり縁富をもちひしが其所にの流例の源手に心を付流を化して病中をふせぎて勝手の料理をつくりけるとぞ然るにかの所を涙しながら其事を前の流の人と成りけるに終延しけるにしたりとてさんげ語らるの上武士の心もちて其の猶子を涙ながら御料理人ても此の流の料理代をつかハし安猿に命別ちるとて世人ハ事の実をしりて是何星右衛門が其のおのれに不勇全まてよつてまつての忠勤ちりぬるとぞ人と是を称しける

日本諸士百家記前之三終